

学位請求論文審査報告要旨

2012年12月12日

申請者 松田 真希子

論文題目 ベトナム語母語話者の日本語教育に関する総合的研究

論文審査委員 庵 功雄
五味政信
河野俊之

1. 本論文の内容と構成

本論文は、ベトナム語を母語とする日本語学習者（以下、「ベトナム語話者」と称する）に対する日本語教育を考える上で問題となる諸現象を多角的に論じたものである。

国際交流基金の調査によると、2009年現在でベトナムの日本語学習者数は全世界の日本語学習者数の第8位であるが、インドネシアと並んで、近年日本語学習者数が急増している。しかし、これまでの日本語教育ではベトナム語話者に特化した研究はほとんど行われていない。本論文は、音声・音韻から談話分析、自然言語処理までを含む射程の広い研究であり、ベトナム語話者を対象とした最初の総合的日本語教育研究として、重要な意義を有している。

本論文の構成を以下に掲げる。

第1章 序章

- 1.1 研究の背景
- 1.2 ベトナム人日本語学習者に対する日本語学習意識アンケート
- 1.3 母語の異なりを考慮した日本語教育研究の重要性
- 1.4 論文の構成と概要

第2章 ベトナム語母語話者の日本語教育のための文法研究

- 2.1 ベトナム語母語話者の名詞句の習得
- 2.2 ベトナム語母語話者のアスペクト習得：シテイナイを例に
- 2.3 この章のまとめ

第3章 ベトナム語母語話者の日本語教育のための文字・語彙研究

- 3.1 はじめに
- 3.2 漢語の日越対照
- 3.3 ベトナム語母語話者にとって漢越語知識ほどの程度習得に有利に働くか
- 3.4 対訳作文データベースからみたベトナム語母語話者の語彙使用
- 3.5 ベトナムにおける漢字・語彙教育の在り方について

第4章 ベトナム語母語話者の日本語教育のための談話研究

- 4.1 はじめに

- 4.2 先行研究
- 4.3 本章における枠組みの提示
- 4.4 上級話者と超級話者の談話上の異なりについて
- 4.5 上級のベトナム語母語話者との談話上の異なり
- 4.6 まとめと今後の課題

第5章 ベトナム語母語話者の日本語教育のための音声コミュニケーション研究

- 5.1 はじめに
- 5.2 日本語母語話者による聴覚印象実験
- 5.3 自然発話の分析：OPI インタビューデータを用いて
- 5.4 ベトナム語母語話者のフィラーとあいづちについて
- 5.5 日本語発音熟達者のラーニングヒストリー
- 5.6 この章のまとめ

第6章 ベトナム人日本語学習者のための言語処理研究

- 6.1 はじめに：機械翻訳の仕組みと問題点
- 6.2 漢字を媒介にした越日機械翻訳システムの開発と評価
- 6.3 日-越 WEB 翻訳・辞書ツールの開発と評価

第7章 終章

- 7.1 本論文の成果
- 7.2 今後の展望と課題
- 7.3 日本語をベトナム語母語話者に開かれたものにするために

参考文献

使用した言語資源およびツール
資料

2. 本論文の概要

本論文は、全7章からなり、統語論、文字論、語彙論、談話分析、音声・音韻論、および、自然言語処理の観点から、ベトナム語話者の日本語使用の実態を分析し、「ベトナム語話者のための日本語教育」にとって必要な方法（論）を考察したものである。

第1章は、論文全体の導入部であり、ベトナム語話者に対する日本語教育における問題点がいくつか指摘されている。例えば、ベトナム語話者は日本語能力試験 N2 の得点分布の「言語知識、読解、聴解」の全てにおいて、日本語国内の受験者、海外での受験者いずれの平均をも下回っていること、松田氏が関わっている初級日本語コースにおいても、ベトナム語話者の成績は他の母語話者と比較して芳しくないことなどが指摘されている。そして、本論文執筆の最大の動機付けが、「ベトナム語話者に対する日本語教育においては、母語であるベトナム語の特質を踏まえた最適の日本語教育のあり方を検討しなければ、不要な学習コストを課すことになったり、習得の遅れや挫折を生むことになったりする」という松田氏の現状に対する強い危機感から生じていることが述べられている。

続く第2章から第6章が本論文の各論となる。

第2章では、統語論の観点からの議論が展開されている。具体的には、名詞句における誤用とアスペクト習得の問題が論じられている。

名詞句（「N1のN2」）における誤用は、ベトナム語を含むアジア7言語の母語話者との比較の中で検討されている（国立国語研究所が公開している「対訳作文データベース」の分析による）。誤用のタイプには、「の脱落」（e.g. 正月買い物）、「母語の漢語の直訳」（e.g. 止煙席）、「語順の倒置」（e.g. 先生校長）などさまざまなタイプがあるが、ベトナム語話者はデータベースに実際に出現した全てのタイプの誤用が観察された。そして、このことが、ベトナム語が主要部前置言語で修飾語と被修飾語の語順が（日本語とは正反対の）「被修飾語+修飾語」の語順になることや、ベトナムが漢語文化圏で語彙の中に中国語由来のものを多く持っていることなど、ベトナム語の独特の言語学的特徴に由来するものであることが論じられている。

一方、アスペクトの習得に関しては、まず、一人称を主語とする否定過去を表す無標の表現が「～していない」であることが主張される。例えば、「先週、例のパーティーに出ましたか？」に対する否定の無標の答えは、「いいえ、出ませんでした。」ではなく、「いいえ、出ていません。」であることが指摘されている。このことは、一部の先行研究では指摘されているものの、日本語学の定説とは食い違うものである。この章では、まず、この指摘の妥当性がアンケート調査によって確認される。続いて、初級日本語コースで、「～しましたか」に対する答えを「～していません」とする形で導入するという授業実験を行った結果が報告される。実験の結果自体は必ずしも成功とは言えないが、仮説検証の手段として授業実験を行うという試みは日本語教育文法の方法論として大いに参考にすべきものであると言える。

第3章では、文字論、語彙論の観点からの考察が述べられる。

ベトナムでは現在、漢字表記は全く行われておらず、一般的には非漢字圏と見なされているが、実際には中国語由来の語彙（「漢越語」）をかなり有している。ベトナム語が有するこうした特徴を、ベトナム語話者の日本語学習に有効に利用することはできないかということを検討するのがこの章の最大の目的である。

まず、漢字音の対応関係の問題が論じられる。ベトナム語には「HOI DAM（会談）」のように、日本の漢字音との明確な対応関係がある語が一定数存在する。日本語能力試験の出題基準に照らして、こうした語の対応関係を調査した結果、ある程度の対応関係が見られる語が全体の50%程度存在することが明らかになった。そして、1,2級という上位の級になるほど、こうした一致率が高くなることも示されている。さらに、初級終了程度の日本語の知識を持っているベトナム語話者にベトナム語の漢越語を見せて、それに対応する日本語の単語を指摘してもらうという実験を行った結果、日本語の知識がほとんどのない学習者の場合とは異なり、非常に高い確率で対応関係を指摘できることがわかった。このことは、中級以降の上位の級においては、漢越語の知識を日本語学習にとって有利に生かすことが可能であることを示唆している。

第4章では、談話分析の観点からの考察が述べられる。

学習者言語における談話構成と母語との関連性はこれまでほとんど明示的に論じられてきていない。この章では、学習者の口頭運用能力を測るための現在最有力の手段である OPI

のデータを用いて（松田氏自身、OPIのテストの資格を有している）、ベトナム語話者のうち、上級学習者が持っている談話構成上の特徴が、指示表現や「のだ」によって表される結束性の観点を中心に考察されている。その結果、ベトナム語話者の発話には、ソ系の指示表現や「のだ」が少なく、このことが結束性を下げていると考えられること、聞き返しが多く、それが他の母語話者に比べ、聞き手に対する負荷になっていることなどが論じられている。ただし、これらの特徴の多くは、中国語話者にも見られるもので、必ずしもベトナム人固有の問題であるとは断定できない。

第5章では、音声・音韻論の観点からの考察が述べられる。

まず、ベトナム語話者の発音上の特徴として、語中の声門閉鎖やきしみ音の多用があり、このことが、ベトナム語話者の発音に対して「苦しそうな」ものという印象を与えていることが指摘されている。その他にも、音調面で母語の干渉と見られる現象があることが指摘されている。

次に、日本語母語話者と、ベトナム語話者を含む4言語話者（中国、韓国、タイ、ベトナム）の読み上げ音声をランダムに配置した音声データを日本語母語話者7名に聞かせて、「自然さ、印象の良さ」など7つの項目について7段階評価および自由記述で答えてもらうという聴取実験を行い、上記のベトナム語話者の発音上の特徴についての分析を行っている。その結果、ベトナム語話者の音声の聴覚印象は最も低い評価となった。そして、このことには、ベトナム語の声調が持つ他の声調言語とは異なる特徴などが影響を与えている可能性が示唆されている。

続いて、OPIデータに基づいて、ベトナム語話者の発話があいづちとフィラーの使用状況という観点から分析されている。その結果、中級までは母語の転移と見られるフィラーが数多く見られるものの、上級レベルではそうしたケースは減少し、他の母語話者との違いはほとんどなくなるということが明らかにされている。

第6章では、自然言語処理の観点からの考察が述べられている。

まず、ベトナム語に関する機械処理の現状が紹介される。現状では、まだベトナム語と他の言語との自動翻訳は実用レベルには達していないこと、日越翻訳においても精度は決して高くないことが指摘される。続いて、松田氏自身の創案による機械言語処理システムが提案される。この手法の特徴は、ベトナム語を音節単位に、日本語を文字（漢字）単位に分解し、それぞれを対応させるというものである。この手法をとる背景には、第3章で見た日越相互の漢字語の共通性がある。次に、この手法で、日越の平行コーパス（一般的な内容のテキストおよび科学技術系のテキスト）や辞書（日越の漢字語辞書および工学用語辞書）のデータを用いて、評価文をシステムに翻訳させるという実験が行われる。その結果、小規模の統計的機械翻訳においてはこの章で提案されている手法が有効であることを示唆された。

最後の第7章では、本論文の成果が述べられる。

続いて、さまざまな母語話者から見た日本語の習得困難度を捉える試みについて述べられる。同様の研究は、英語母語話者を基準にしたものが既に存在し、そこでは、日本語はアラビア語、中国語、韓国語と並んで最も習得が困難な言語に分類されている。松田氏の案では、ベトナム語話者にとって日本語は（現状では）最も習得が困難なグループ（Hard）に属す

ものとされている。ただし、ベトナム語話者にとって日本語は習得の動機付けが極めて高いものであるため、潜在的には中程度に困難なグループ (Medium) になる可能性を有していると、そのためにも、本論文で提案されたさまざまな問題についてより一層考察を深めるとともに、第6章でも部分的に紹介されているような、E-learning などに基づく学習支援ツールを積極的に開発していくことが重要であることが指摘されている。

3. 本論文の成果と問題点

本論文の最大の成果は、ベトナム語話者のための日本語教育にとっての問題点を極めて多面的かつ実証的な形で取り出した点にあると言える。

上述のように、本論文の対象は、音声・音韻論、文字論、語彙論、統語論、談話分析から自然言語処理に至る、極めて多面的なものであり、ベトナム語話者を対象とした研究は言うまでもなく、他のいかなる言語の話者を対象とした日本語教育研究においても、これまで見られなかった射程の広い研究であり、何よりもこの点において、第二言語習得研究をはじめとする日本語教育研究全般に対する貢献は大きい。

また、本研究の直接の研究対象であるベトナム語話者のための日本語教育という点においても、従来必ずしも明示的に取り上げられていない問題、例えば、第2章や第4章で論じられている問題への掘入れを行っている点において、これまでの研究水準を大きく前進させるものとなっている。

さらに、テキストマイニングや統計翻訳といった、これまで日本語研究・日本語教育研究においてほとんど用いられてこなかった研究手法を積極的に取り入れている点、あるいは、第2章で行われている仮説検証のための授業実験なども、今後の日本語研究・日本語教育研究において、是非とも参考にしていくべきものであると言える。

そして、何よりも、松田氏が本論文を執筆した最大の目的が、第7章にも書かれているように、ベトナム語話者に対する日本語教育の改善という現実的な目的意識に深く根ざしていることが重要である。

現在、世界各地で日本のポップカルチャーなどをきっかけに日本語に興味を持つ人が増えている。これまでの日本語教育は、世界第2位の経済大国としての日本という「虎」の威を借りた「狐」の側面が強かったが、そうした「虎」の威光が長期低落基調に入っていることが明らかになっている現状においてはそうした「虎」からの自立が求められている。言い換えれば、黙っていても客（学習者）が確保できるということはないのだという自覚を持って行動する必要がある。そういう意味で、上記のような、日本経済とは無関係の部分で日本語に興味を持っている学習者をいかに本格的な日本語学習に導けるかということが日本語教育にとっての喫緊の課題である。そうした観点から本論文を見ると、松田氏が対象としているベトナム語話者は、日本語学習に対する動機付けが高いという点、日本語学習者数が急増しているという点において、今後の日本語教育を展望する上で極めて重要な研究対象である。松田氏が、ベトナム人にとっての日本語学習を Hard から Medium に変えたいということが本論文の最大の執筆動機であると述べている点には審査員一同強く共感する。

このように優れた面を備えた本論文であるが、一方、問題点もいくつか存在する。

第一の問題点は、研究の射程が広いことの反作用とでもいうべきであろうか、個々の問題に対する踏み込みが必ずしも十分であるとは言えない部分があることである。例えば、名詞句の問題についていえば、「N1のN2」が「N1N2」になることができる条件を日本語の中で十分に明らかにしてからベトナム語と対照するというのが対照研究としては常道であるが、日本語の中でどのような場合に「の」が脱落可能であるのかという点についての解答は本論文を通して必ずしも十分に明らかになっていない。

第二の問題点は、他言語との比較を重視するあまり、ベトナム語自体の特徴に対する踏み込みが甘い部分が散見される点である。つまり、どこまでが他言語でも見られることで、どこからがベトナム語話者に固有であるのかということが十分に仕分けされていない部分が見られるということである。

第三の問題点は、特に第5章において、ベトナム語話者の音声・音韻的特徴をあぶり出そうとするあまり、負の転移の側面が強調されすぎているのではないかという点である。さらにいえば、単に違いを指摘しただけでは問題点は改善しないわけであるから、具体的な問題解決のための道筋（教授法など）が示されればよりよかつたであろう。

このような問題点は存在するものの、このことは決して、本論文が全体として明らかにし、それへの対案を示している諸現象の価値を減じるものではない。ここで指摘された問題点については、松田氏自身が今後の研究活動・教育実践の中で十分に解決していつてくれるものと確信する。

4. 結論

以上から、本論文が学位論文に値する優れた研究であることを認め、松田真希子氏に一橋大学博士（学術）の学位を授与することが適当であると考えます。

最終審査結果の要旨

論文審査委員 庵 功雄
五味政信
河野俊之

2012年11月20日、学位請求論文提出者、松田真希子氏の論文「ベトナム語の母語話者の日本語教育に関する総合的研究」に関する疑問点について逐一説明を求め、あわせて関連分野についても説明を求めたのに対し、松田氏はいずれも十分かつ適切な説明を与えた。

また、口頭試問に先立って行われた外国語能力試験にも松田氏は合格した。

よって、松田真希子氏が学位を授与されるに必要な研究業績および学力を有すると認定し、最終試験において合格と判定した。